哲学研究　第四百七十八号

プロチノスに於けるテオーリアーの問題

田之頭安彦

哲学用語としてのテオーリアー(1)(θεωρία)は、既にプラトンやアリストテレスの哲学体系の中に於ても、重要な意義を持つものとして、(2)注目に価するものがあるが、プロチノスに於ては、彼の「総て真実在は、テオーリアーから生じ、テオーリアーでもある。」(エネアデス三巻・八章・七節。以下Ⅲ・八・7と略記。他も同様。)「総て存在するものは、テオーリアーの副産物である……。」(Ⅲ・八・8)という言葉の示す通り、その存在論・認識論の中心課題をなし、彼の「自然(ピュシス)・テオーリアー・一者(ヘン)について」という小論の中では、人間のあらゆる活動はもちろんのこと、動植物や大地でさえも、総てテオーリアーを目的とし、渇望するとさえも、極言されているのである。(Ⅲ・八・1)

そこで私は、㈠自然と動植物のテオーリアー、㈡人間のテオーリアー、㈢一者の認識とテオーリアーの関係、㈣ジアレクチケーの問題等を、順を追って明らかにし、彼の哲学の中心課題へと、私に可能な範囲内で、近づいていくこととしたい。

一　自然と動植物のテオーリアー

プロチノスの存在論は、周知の如く、一者を源とし、恰も泉から水の溢れ流るる如く、あるいは太陽から光が、四

方に照り輝いている如く、ヌース・プシューケー・ピュシスが作られていく過程で、いわゆる流出説といわれる下降道と、万物は、かの父たる一者より生みだされたものであるから、恰も子が生みの親をしたい求めるように、「万物は、自然の本性の、争いがたき力にひかれて、かのものをしたい、あこがれ求める……。」(V・五・12)ということばでいいあらわされる、愛慕の道、テオーリアーの道としての上昇道という、二つの道によって支えられ、ピュシスのテオーリアーも、その直接の生みの親たる世界霊魂をしたい求め、それと合一せんとする愛慕の情に端を発しているとされる。しからば、ピュシスのテオーリアーは、その目的である、世界霊魂との合一を、果してなしとげることが出来るのであろうか。以下彼のことばを辿りながら、眺めていくこととしたい。

彼は、エネアデス三巻・八章・四節において、「ピュシスといわれているものは、プシューケーであり、より先の、より力のある生命を持ったプシューケーよりうまれたもので、静止しながら、彼自らの中に、上へでも、また下へでもないテオーリアーを持っている、……。若し人が、ピュシスに或る種の理解力(シュネシス)や知覚(アイステーシス)を与えんと欲するならば、……(ねむっている人の)夢の理解力や知覚を、目覚め(ている人)の理解力や知覚と比較するならば、丁度そのようなものである。……そして、(ピュシスの)テオーリアーは、沈黙し静かではあるが、漠然としている。何となれば、他にそれよりも、観るにより明らかなテオーリアーがあり、(ピュシスの)テオーリアーは、そのテオーリアーの影(エイドーロン)であるから。で、実にこの故に、(ピュシスの)テオーリアーから産出されたものは、あらゆる点に於て、弱きものである」と述べ、(1)ピュシスも霊魂である、(2)霊魂である以上、理解力や知覚を持つと考えられるが、たとえそうであるとしても、それは、ねむっている人のそれに等しい、(3)ピュシスのテオーリアーは、より明らかなテオーリアー、すなわち世霊界魂のテオーリアーの影であることを明らかにするとともに、Ⅲ・八・2では、ピュシスをロゴスとみなしている。(3) このロゴスは、彼が、Ⅲ・二・2に於て、「ヌースは、静けさを保ちながら、自分の或る部分を、素材(ヒュレー)に与えることによって、万物を作ったのであるが、この或る部分とは、ヌースから流出せるロゴスである」と述べてい

るように、万物を作る力であると考えられる。すなわち、ピュシスはロゴスであり、物を作る力（デュナミス）であり、或る種の生命力である（Ⅲ・八・3）が故に、テオーレインし、作るのである。

以上の点を綜合してみると、ピュシスは、生命力であり、ロゴスであるが故に、テオーリアーを行うのであるが、そのロゴスは、ヌースのロゴスとしての、世界霊魂というロゴスのロゴスであるが故に、影の如きものとなっており、たとえ、テオーリアーを行うとしても、それは丁度我々が、母の夢を見ようなどとは、意識せずにねたのであるが、我々の潜在意識の中にある、母に対する愛慕の情によってか、たまたまその晩、母の夢を見た、というような、無意志的[4]なテオーリアーにすぎぬということになる。

更に我々は、夢で見る母を、我々の外に立って、我々にやさしくほほえみかける、現実の母としてではなく、まぼろしの母として、心の中でとらえるように、夢みるピュシスは、母たるロゴスのまぼろしを、自分自身の中でとらえ、テオーレインし、そのロゴスにみたされ、みたされることによって作るのであるが、我々が、夢で母を見ても、それを見ることによって、起きあがり、母のもとへと走りよることのないように、ピュシスも、自己自らの中で、テオーリアーをもっても、母たる世界霊感のもとへと昇り、それと合体することはない。何となれば、世界霊魂は、人間霊魂と共に、ヌースから流出したものではあるが、人間霊魂のように、直接形態界に降りてくることはなく、常にその上にあるのであるが故に（Ⅳ・三・4）、そのロゴスは、前述の如く、全く弱く、影のようなものとなっているからである。すなわちピュシスは、母たるロゴスの影としてのロゴスである自分自身をテオーレインし、テオーレインすると同時に、作るのではあるが、そのテオーリアーは、上昇道を辿ることはない。これが、ピュシスに於ては、θεωρία=ποίησις といわれるゆえんであろう。彼はいう、「ピュシスは、静かに留まりながら、彼自らの中に、上へでも、また下へでもないテオーリアーを持っている」（Ⅲ・八・4）、「さてかくて、ピュシスは、テオーリアーであり、テオレーマであり、ロゴスであるということ、そのことによって、且つそれらのものであるという限りに於て、作るのである。

製作(ポイエーシス)は、(ピュシスに於ては)テオーリアーとして、我々に示される。何となれば、製作は、テオーリアーとして留まり、他の事は行わず、テオーリアーであるということによって製作するテオーリアーの産物であるから」と(Ⅲ・八・3)。かくてテオーリアーは、ピュシスに於ては、その支柱である生産性と上昇性[5]のうち、生産性しか所有しえぬのである。

さて、ロゴスとしてのピュシスは、自己自らに対するテオーリアーを行うことによって、他のロゴスを作り、それを素材に与えて、動植物を作るのであるが、この動植物のロゴスは、影としてのロゴスの、またその影なのであるから、そのテオーリアーは、全く弱く、すでにその支柱である上昇性と生産性の二つを、共に失っているのであり、彼も、「可視的な形(モルフェー)に従ってあるロゴスは、今や最終段階にあり、生命なき死体であって、もはや、他のものを作り出すことは出来ぬ」(Ⅲ・八・2)、と述べている。

二　人間のテオーリアー

このように、ピュシスのテオーリアーが弱くなったのも、もとをただせば、世界霊魂が形態界に降りてこず、従ってピュシスは、世界霊魂の影にすぎなかったからであるが、人間霊魂は、直接形態界に降りてきて、肉体との共同関係(コイノーニア)にはいるのであるから、そのテオーリアーは強く、テオーリアー本来の道である上昇道を、辿ることが出来る。しかし自然界に於て、ピュシスのテオーリアーと、動植物のそれとの間に、相違がみられたように、人間の場合に於ても、ヌースからでた魂の強弱によって、それぞれの間に、相違がみられる。

彼によると、個霊(人間霊魂)は、ヌース界より、肉体の世話をみるために、感覚世界へと降りてきて、肉体との共同関係(コイノーニア)にはいったのであるが、しかし個霊は、ヌース界との関係を、全く断ってしまったというわけではなく、そのはじめの部分は、宇宙をこえた上方の世界(ヌース界)にあり、従って我々の魂は、上のヌース的な部分と、下の

肉体との共同関係を持つ部分とからなるとされる（Ⅰ・一・8、Ⅳ・一、Ⅵ・三・12）。

だがしかし、魂の本質は、肉体との共同関係の中に、見出されるべきではなく、「それは、ノエトンなる種族に属するもの、神的なる部分に属するもの」（Ⅳ・二・1）であり、「常にヌース界にあるということが、魂に属する性質なのである」（Ⅳ・四・25）。従って我々は、我々の魂が、肉体の眼を通して見る諸物体の美は、ヌース界の美の「影像や足跡や陰にすぎぬことを知り、それを逃れて、諸物体の美が、それの影像であるところの、本体に向わねばならぬ。何となれば、若しも或る人が、その影像を、あたかも真実なものとでも思って、つかまえようとし、それに向っていくならば、……水面に写りただよっている美しい影像を、つかまえようとして、その流れの奥底深くに落ちこんで、見えなくなってしまうように、そのように、諸物体の美に執着し、それを捨てぬ人は、肉体に於てではなく、魂に於て、暗闇の、ヌースにとっては、全くいやな、奥底へと沈んでしまい、彼は、そのハデスの国で、盲目として留まり、そこに於ても、この世に於ての如く、陰と一緒に住むであろうから。」（Ⅰ・六・8）。

従って我々は、「或る一つの肉体のまわりにへばりついて、それによって刺戟されることのないようにと、教えられねばならぬ」（Ⅰ・三・2）。実に魂の弱さとは、肉体の世話に追われ、自分がそこから出てきた源、自分の本質を忘れ、あたかも自分にとっての幸福は、肉体との共同関係の中にでもあるような、錯覚にとらわれ、肉体という泥沼に、落ちこんでしまうことに起因するのであり、この状態が長く続くと、魂は、全体（トパーン）からの逃亡者となり、ノエートンから遠く離れ、それを見なくなってしまうのである（Ⅳ・八・4）。

かくて魂は、「ピュシスよりも、より多くのものを持っているので、より平静で、より完全であるから、より一層テオーレーチケーである」（Ⅲ・八・6）のだが、肉体との共同関係の故に、ヌースにくらべると、そのテオーリアーは弱く、不完全で、不完全であるが故に、自己自らに欠けているものを、よく見ようとして、プラークシスを行い、そのプラークシスによって現われたエイドスを、テオーレインするのである。（すなわち彼も、プラークシスは、テオーリ

アーを目的とするということの理由づけとして、Ⅲ・八・4に於て、人間の場合でも、魂が弱くて、テオーリアーの力が充分でなく、対象を充分に把握できぬ場合には、プラークシスを行うと述べている。）これが、彼のいう ἡ θεωρία ἐξ ἐπιστήσεως（考察あるいは観察に基づくテオーリアー）なのであって、彼は、この場合の認識作用を、魂が「自己自らの領域を、後に残して、他の事物の中にはいってゆき、次に再び自己自らへと戻ってきて、自己自らの残された部分で、テオーレインする」と述べているが、これは、「思慮（ジアノイア）が、感覚から与えられた印象（テュポス）を、判断することによって、テオーレインする」（Ⅰ・一・9）という認識作用で、いわゆる学問一般のテオーリアーは、これに属するのであろう。この場合、あくまでも、その判断の基礎をなすものは、外的対象に依存するのであり、それは、いわば、ヌースの足跡（イクネー）の如きものであるから、それについてのテオーリアーも、それだけ不完全なものとならざるをえない。

このように、プラークシスやポイエーシスやは、魂の弱さに基づくものであり、テオーリアーを、その目的とするのであるが、プラークシスやポイエーシスの総てが、そうであるというわけではない。すなわち彼はいう、「かくして我々は、いたる処に於て、プラークシスやポイエーシスが、テオーリアーの弱さであるか、テオーリアーの結果物（パラコルーテーマ）であるのを、見出すであろう。すなわち或る事が、実践された後で、人が、それ以外の何ものも持たなければ、それは、テオーリアーの弱さであり、製作されたものよりも、テオーレインするにより優れたものを、その製作物よりも、より以前に持つなれば、それは、テオーリアーのパラコルーテーマである」（Ⅲ・八・4）と。要するに、我々の魂の力が弱いために、より明確なテオーリアーを得べく、プラークシスやポイエーシスを行う場合には、そのプラークシスやポイエーシスは、テオーリアーを目的としている、といわれるのであるが、魂が、感覚的事物にわずらわされることなく、それだけ、強いテオーリアーを得ている場合には、何も、テオーリアーを目的として、プラークシスやポイエーシスを行う必要はないのであって、そのようなことは考えなくとも、真のエイドスに対するテオーリアーを行った結果、その光にみたされ、全く結果的に、ポイエーシスやプラークシスが行われるにいたったのである。この場

合の製作や実践は、いわゆる名人芸とか、魂のこもったとかいうことばで、表現されよう。(6)

さて、以上のようにして、ἡ θεωρία ἐξ ἐπιστήμης は、魂の弱さに基づく、弱きテオーリアーであること、及びテオーリアーの弱さは、魂の弱さに基づき、魂の弱さは、肉体との共同関係に基づくことを、見てきた。従って我々が、強きテオーリアーを得るためには、魂と肉体との共同関係を、断ち切らねばならぬ。これが、とりもなおさず、魂の純化(カタルシス)なのである。

「魂は、それ自らが、美しくならなければ、美(ト・カロン)を見ることはできない。従って先ず始めに、善にして美なるもの(タガトン・テ・カイ・カロン)を見ようとするものは、皆神の如き(テオエイデース)ものとなり、美わしきものとならなければならぬ」(I・六・9)。

「魂が醜いのは、肉体や質料(ヒューレー)との混合・複合・転落によると言って正しいだろう。魂の場合、醜さは、純粋無雑でない点に存する。あたかも黄金の場合、醜さは、土塵にまみれている点に存するように。で、それを拭い去ったならば、黄金が後に残り、それは美しいものとなる、他のものから引き離され、自己自身としか交らないので。魂も同じこと。余りに肉体にかかわりあうことから生ずる欲望から離れ、その他の情念(パトス)からも解放され、うつせみの故に身にまとうものから純化され、自己純一に留まるならば、自己以外のものに由来する醜さは、すべて脱却するであろう」(I・六・5、式部久氏訳)。(7)

「諸物体の美は、影像や足跡や陰にすぎぬことを知り、それを逃れて、諸物体の美が、それの影像であるところの、本体に向わねばならぬ」(I・六・8)。

「さてそれでは、我々の父なる国への旅・逃避行とは何であるか。我々は、徒歩でもって、その旅を遂行すべきではない。何となれば、我々の足は、この世の中では、何処へでも我々を運んでくれる、というにすぎぬからである。しかしまた貴方は、馬車や船も、手段として用意すべきではない。そんなものは、総て捨て去り、見るべきではない。

そうではなくて、肉眼を閉じ、その代りに、万人が持ちながら、しかも極く少数の人しか用いない、他の眼[8]をそれに代用し、その眼を目覚めさすべきである」（Ⅰ・六・8）。

「で、真なる目覚めとは、肉体からのであって、肉体と共にではない、起きあがりであり、肉体を離れることである。何となれば、肉体を伴って起きあがることは、一方のねむりから、他方のねむりへ、いわば、一方のねどこから、他方のねどこへとの、移行にすぎぬから」（Ⅲ・六・6）。

「魂は、純化によって、エイドスとなり、ロゴスとなって、全く非肉体的で、思惟的な、神的なものに、極めてふさわしいものとなる。それは美の源泉であり、これと同類のもの一切の生ずるところでもある。したがって魂は、ヌースの方に引きあげられれば、それだけ、ますます美しい、ヌースなり、理性領域なりは、魂固有の美であって、魂に無縁な美ではない。そこに至って始めて魂は、真に魂なのであるから」（Ⅰ・六・6、式部久氏訳）[9]。

以上の引用文からして、既に明らかであるように、我々の魂は、ヌース界から宇宙領域へ、更に其処から感性界へと降りて来たのであるから（Ⅳ・一、Ⅳ・三・17）、魂の故郷はヌース界にあり、魂にとっての本質は、ヌース的なものでなければならぬ（Ⅳ・二・1）。魂が、肉体との共同関係にあるということは、魂にとっては、本性に反した状態にあることなのである。魂は、自己の故郷・ヌース界へと帰えって行かねばならぬ。そこに於てこそ、はじめて彼女は、真の美しさを見出し、自分も美わしくなることが出来るのである。しかしそれは、肉体の足をもって旅立ち、肉体の眼で見ることのできるものではない。彼女は、自分の本当の眼を、目覚めさせねばならぬ。そのためには、純化が必要である。純化とは、魂が、自己以外の他のものに眼を向けず、また他のものについての臆見（ドクサ）を持たず、ただ自己のみとなり、他と共にあるということがないようにし、諸々の映像（クー・エイドーラ）を見ず、それから情念が作られないようにすることで（Ⅲ・六・5）、魂は、この純化によってのみ、肉体から自由になり、その故郷であるヌース界へと飛昇し、ヌースとなり、神的なものとなることが出来るのである。

純化によって、ヌース界へと飛昇してきた魂は、いわば、視力（オプシス）の如きものとなり、見るということのみを、自己の本質として持つにいたる。そして、そのようなものになった魂にとって、見らるべきものとは、ヌースに他ならない（Ⅲ・九・5）。だがしかし、彼女は、それを自己の外部にある、すなわち感覚物のように外的対象として見るのではない。何となれば、ヌース界では、「総てがどこまでも透きとおっていて、さだかならぬものや光をさえぎるものは、何一つとしてなく、総てが、相互に如何なる点に於ても、底の底まで明らかなのである。何となれば、光と光が、相互に、照らし、透徹しあっているからである。というのは事実、総てが、自己自らの中に総てを持ち、また更に、互いに他の中に総てを見るのであり、従っていたる処に総てがあり、総てが総てであり、各個が総てで、その輝きは無限であるから。何故なら、（この世界では）各個が大であるから。というのは、ここでは、小なるものも大なのであるから。……また他方、純粋の動もある。それは、動かすものが、その動と別ものであることによって、この動の進展を乱すということがないからである。しかしまた（そこには）、乱されることなき静もある。というのは、静止していない何ものも混入していないからである」（Ⅴ・八・4）というように、感覚世界に於ての如く、距離・時間・多少・大小等の対立はなく、総ては、一にして多・多にして一、大にして小・小にして大、動にして静・静にして動、永遠不滅なのであるから。すなわち、魂がヌースを見るといっても、両者の間に時空的なへだたりがあるわけではないのであるから、実はヌースと合体し、ヌースとなれる自分を見るのに他ならない。そして、自己自らが自己自らを見る場合、その間に何ものも介入する余地はないのであるから、誤りを犯すこともなく、それは常に真なのである。またその場合、魂は、ヌースになりきって、ヌースになりきった自分を見るのであるから、この見るということは、ノエインということ以外の何ものでもないのであり、この点に於て、魂はノエーシスの段階に達したといわれるのである。彼はいう、「自己自らを知る人には、二通りある。一つは、人間の魂にのみ固有な思慮（ディアノイア）のピュシスを知る人で、他は、その人よりも優れた人であり、ヌースとなることによって、自己自らを、ヌースに従って知る人で、彼は、ヌ

ースによって、自己自らを、もはや人間としてではなく、全く他のものとなり、彼と一緒に魂のよりよき部分のみを、ひっぱり連れながら、運びこんでいるものとして、ノエインするのである」（V・三・4）と。人間としてではなくということは、ヌースとしてということである。しかし、全きヌースとなってしまうわけではない。何となれば、ヌースとなれる魂は、あくまでも魂として、感覚世界に降りて行き、肉体との共同関係にはいる可能性を持っているからである。[10] 従って「魂のよりよき部分をひっぱり連れながら」であり、また「自己自らを消滅してしまうことによって、ヌースと一緒になったのではなく、両者は、一であると共に二でもある」（VI・四・2）のである。とはいえ、魂が、純化されてヌース界にある限り、両者は一なのであり、魂が見るということは、ノエインするということに他ならない。従って、*τὸ νοεῖν=τὸ θεωρεῖν*, 故に *ἡ νόησις=ἡ θεωρία* なのである。

このようにして、魂が、生みの親にあこがれ、それに対するテオーリアーを持つということは、ヌース界に於ては、とりもなおさず、ヌースとなれる自己自身に対するテオーリアーを持つということに他ならない。そしてテオーリアーを行う魂と、その対象は、同一なのであるから、そのテオーリアーは、常に真であり、欺きを受けることはないのである（IV・四・44）。この場合、ヌースとなれる魂の、ヌースたるゆえんは、それが自己自らをノエインするところにある。このノエーシスは、また真実在・生命力でもあるのである。で、この世界に於けるテオーリアーは、ヌースの本質的な働き、すなわちノエシスなのであるから、この世界では、*τὸ νοεῖν=τὸ εἶναι=τὸ ζῆν=τὸ θεωρεῖν* なのである。すなわち、ヌース界に到達し、真の自己自らとなれる魂は、ヌースとなれる魂であり、その本質はテオーリアーにあり、常にテオーリアーを行うことによって、生命と真実在にみちているのであって、彼が、「生けるテオーリアー（テオーリアー・ゾオーサ）」と呼ぶテオーリアーは、正にかかるテオーリアーなのである（III・八・8）。

三　一者の認識とテオーリアー

ヌースは、真に存在するものとして、存在者の世界を思惟し、限定し、端的に存在者の世界そのものである。故にヌースが、存在者の世界を思惟するということは、真に一切の存在者である自己自らを思惟することに他ならない（V・九・5）。かくてヌースは、思惟の対象を外に求めるのではなく、自己自らの中に求めるのであり、ヌース・ノエーシス・ノエートンは一なのである（V・三・5）。

しかしノエーシスのあるところには、完全な意味での「一」はありえない。ヌースが、自己自らを思惟するといっても、τὸ νοεῖν ということが考えられる以上、そこには、思惟する主体と、思惟される客体がなければならず、既に「他」が考えられているのである（IV・七・39）。それにまた、ヌース界では、総てが一でありながら、しかもその本性上、無限なることによって、多でもあり、一即多・多即一で（VI・五・6）、多くの存在が考えられているのであり（VI・五・4）、この故にこそ、τὸ νοεῖν ということも可能なのであるが、しかし、プロチノスによれば、思惟するものは、窮極的な、尊いものではない。何となれば、思惟するという作用が行われるということは、自己の中に欠点があることによるのであり、完全な善を所有しておらぬが故に、それを求めて、思惟するのであるから。すなわちノエーシスは、絶対的な一でも、窮極的な善でもなく、それは、善に対するノエーシスなのである。従って絶対的に一で善なるものは、ノエーシスを超えてあるものでなければならぬ（III・八・9）。実に、ヌースは、魂が、あこがれ求めていた絶対的な善でも、彼女の幸福の、窮極的なよりどころでも、真実のふるさとでもなく、それを超えてあるものから、産出の力を受け、それに依存し、それから輝かしい光を与えられることによって、ヌースとしてあったのである。従って純化され、真にそれ自らとなり、ヌースとなれる魂は、更に絶対者・一者・善者を求めての旅路を辿らねばならぬ。

「ヌースは美しく、しかも総てのものの中で最も美しく、すみきった光、すみきった泉の中に横たわり、諸々の存在するものどものピュシスを囲み持ち、この美しき世界は、それの陰であり、影像なのであって、全くの美麗さの中に横たわり、（というのは、その中には、非合理とか、暗さとか、非適度ということは、何もないからであるが）祝福された生を送り、それをみ、いわば義務ででもあるかのように、その中にはいって行き、それと合一する人は、驚きの念にうたれるであろう。たが実に、天空を見あげ、諸々の星の輝きを見る人は、それを作ったもののことを考え、探し求めるのであるが、そのように、叡知界（ノエートス・コスモス）を直知し、それを知り、畏敬の念を抱いた人は、それを作りし者について、さてすると、誰が一体このような世界を支え、基礎を与えているのであるか、……とたずねるべきである」（Ⅲ・八・11）。

ヌースは、「美しいのだが、その美は、善者から光を受ける迄は、全然作用しないのである」（Ⅵ・七・22）。

「ヌース界にある各々のものは、自己自らに於てあるものであるが、いわばそれらにうるわしさを、そしてそれらを愛慕するものの側には、愛を与えるというようにして、善者が、それに色づけをすることによって、はじめて愛慕の対象となる。さてこうして魂が、上から流れてくる力を、自己自らの中に受けとると、彼女は動かされ、神につかれたようになり、悩みにみたされて、愛となる。それ以前には、魂は、ヌースに向ってすら、動かされることはない。……魂はひとりで、不精にも、仰むけにねころんでいて、どんなものにも関心を示さず、ぼんやりしており、ヌースが、現に眼の前にいても、それに対して、何の反応も示さない。だがしかし、かの場所から、いわば温気の如きものが、魂にやってくると、魂は、たちまち力を得て、目をさまし、まことに翼をひろげ、眼の前の身近にあるものに、気をひかれながらも、いわば記憶によって、一層価値ある他のものへと、上昇していく。そして彼女のそばにあるものよりも、なおその上に何かがある限り、この愛を与えたものにひきあげられ、本性に従って、上へと昇って行く。かくて彼女は、ヌースをもこえて昇って行くが、しかし善者をこえて行くことはない。何故なら善の彼方には、何も

ないからである。若しヌース界に留まるならば、美しくて高貴なものを観ることは出来るが、しかしながらまだ自分の求めるものを、完全にえてはいない」(Ⅳ・七・22)。

かくて魂は、更に上へと昇って行かねばならない。それには、多くの理由があるが、とりわけ、魂が探し求めているものは、他のすべてが、それに依存するところの、絶対者であるからである(Ⅴ・三・17)。ヌースは、ウーシアであり、真実在であり、大変美しいものではあるが、絶対者は、「ウーシアではなく、ウーシアの彼方にあり、且つ自足的(アウタルケス)なものの彼方にあるもの」(Ⅴ・三・17)、換言すれば、「それは、ヌースの彼方にあるもの」であり、「ヌースでもノエートンでもなく」それから「ヌースやヌースと共にあるノエートンが生ずるところのもの」なのである。従って我々の魂が、「それを見んと欲するならば、(魂は)ヌース以上のものとならねばならぬ。」しからば、魂が「ヌース以上のものになる」とか、「ヌースをも超えて進む」ということは、どのような意味であり、またどうして、そのようなことが可能なのであろうか。

純化によって、肉体との共同関係を断ち切り、ヌース界へと向った魂は、真に自己自らとなり、ヌースとなれる自己に対するテオーリアーを持つにいたった。そして彼女をして、ヌース界へと上昇せしめ、より高度のテオーリアーを持つにいたらしたのは、彼女を生みし父親に対する愛慕の情であった。彼はいう、「一切万物は、自然の性のあらそいがたき力にひかれて、かのものを慕い、かのものをあこがれ求める。あたかもそれがなければ、自分達もありえないという予言でも受けているかのように」と(Ⅴ・五・12)。しかしヌース界にやってきた魂は、今や自分を生みし父は、ヌースではなく、ヌースを超えてあるものであるのを知ったのである。一者は、あらゆるものの善、美の根元者、万物に秩序統一を与えるもの、絶対善・絶対美・絶対一であるが、それ自身に於ては、善でも、美でも、一でもないもの、如何なることばによっても表現されぬもの、否定・肯定の対立を超えた絶対無である。それに対して、ヌース界にはいり、ヌースとなれる魂は、一にして多・多にして一であり、ウーシアであり、真なる生命、真なる存在、真

なる有である。この有による絶対無の把握は、如何にして可能なのであるか。この難関を、彼が如何にして、切り抜けようとしたか。

それは、彼の次の文章をみれば、自ら明らかとなるであろう。すなわち彼は、VI・七・35で、次のように述べている。「ヌースは、二通りの力を持っている。その一つは、それによって、自己自らの中にあるものを見るところの、τὸ νοεῖν に関してある力であり、他は、ヌースを超えてあるところのものを、一種の直観によって（ἐπιβολῇ τινι καὶ παραδοξοτέρᾳ）把握する力で、その力によって、はじめはただ見たのであり、見ることによって、後にヌースを持ったのであり、一なのである。そして正気を持ったヌースの直観（ἡ θέα νοῦ ἐγρήγορσις）が前者で、後者は、愛のとりこになったヌース（ὁ νοῦς ἐρῶν）なのである。……ヌースは、常に νοεῖν しているのであるが、他方そのヌースは、νοεῖν とは別な仕方で、一者を見ているのである。何となれば実際、ヌースは、一者を見ることによって、はらめるものとなり、そして彼から生じ、彼の中にあるところのものどもを、知っているからで、彼がそれらのものを見ている場合に、νοεῖν といわれるのであるが、他方、彼は、彼がまさにそれによって νοεῖν しうるものとなるところの力によって、一者を見るのであるから」と。すなわちプロチノスは、諸々のヌースが生ずる前に、ある一つのヌースがあり、そのヌースが τὸ νοεῖν とは別の、一種の直観によって、一者を観た時、もろもろのヌースをはらみ、生んだのであるとし、かくして、このより先のヌースに、ノエーシス以外の作用を認めることによって、一者把握の可能性を切り開こうとしたのである。

しかしヌースのヌースたる所以は、ノエーシスにあるのであるから、ヌースが、ノエーシスを捨てることは、ヌースたることを捨てるにひとしく、ヌースが、νοεῖν せずに、純然たるノエートンとしてのみあるということは、ヌースとの関係に於ては、ノエートンではあるかもしれぬが、自己自らとの関係に於ては、ノエートンですらない（V・六・2）。しいてそれをヌースと呼ぼうとすれば、正気を持ったヌースに対して、愛のとりこになったヌースと呼ぶより

他はなかったのであろう。ヌースは、ノエートン自身より後のノエートンであり（V・四・2）[11]、ヌースは、一者を、自己自らのノエートンならざる部分によって見るのである（V・五・8）。むしろ、ノエートンは、ヌースでもノエートンでもないもの、すなわち無である、といった方が、より適切であり、かかるものであることによってのみ、絶対無としての一者把握の可能性が開かれるのである。

だがしかし、ノエーシスが、限界に達し、一者は、ノエーシスによっては、把握出来ぬ、ということは、とりもなおさず、テオーリアーが、その限界に達し、それによっては、一者把握は、不可能である、ということを意味する。一者把握のためには、テオーリアーは、テオーリアーたることを捨てねばならない。そこには、もはや鋭き本質探求の道はない。哲学は、ジアレクチケーのたすけを得て、事物の本質を探求し、ここまでやってきたのであるが（I・三・6）、ジアレクチケーの導き手であったエピステーメーも、もはやその用をなさず、愛（エロース）にジアレクチケーやエピステーメーは、その道をゆずらねばならぬ。

四　ジアレクチケーとテオーリアー

ジアレクチケーについては、彼の「ジアレクチケーについて」という小論（I・III）の中で、くわしく検討されているが、その中から、適当な文章を拾いあげてみると、次の二つになるであろう。

「それは、各々のものについて、言論（ロゴス）によって、各々のものが、何であるか、そして如何なる点に於て、他のものと異っているのであるか、それらのものの共通点は何であるか、を言うことのできるたくみ（ヘクシス）である。……それは、善と非善について、そして善に属する物事と、非善に属する物事について、また永遠なるものとは、何であるか、永遠ならざるものとは、何であるか、ということについて、単なる臆見（ドクサ）ではなく、明確なるエピステーメーを持って、これらすべての事柄について、論究（ジアレゲスタイ）していくのである。それは、感性的なもののまわりをさまようことをやめ、ヌース

界に居を定め、そこでは、虚偽をしりぞけ、プラトンのいう真理の野にて、魂を養いながら、自分の仕事をすることになる。それは、プラトンのジアイレシスを用いて、あるいはエイドスから、その他のものをわけ、あるいは事物の本質をきわめ、あるいは第一類（クラーク・ゲネー）にいたり、これらからくみたてられているものを、ヌースによって組合せて、ヌース界全体を、くまなくめぐり、また逆にこれを部分々々に解きほぐして、また最初のものに戻る。その時には、それは、（かのヌース界で、平静を保つという意味で）平静を保ち、もはや何ら煩雑な仕事を持たず、一なるものとなり、一なるものを眺める」（I・三・4）[12]。

「それは、完全なヌースに到達するまで、それに続くところのものを、結びつけたり、織りなしたり、区別したりするのである。すなわちプラトンは、次のようにいっている。『ジアレクチケーは、ヌースやプロネーシスの中で、最も純粋なる部分である』と。従ってそれは、我々の精神能力の中で、最も尊きたくみであるが故に、真実在や、最も尊きものに関してあらねばならぬのであって、プロネーシスとしては、存在者（トオン）に関してあり、ヌースとしては、存在者（トウー・オントス）の彼方（ケイナ）にある者に関してあるのである」（I・三・5）。

この文で、彼は、ジアレクチケーは、善、非善等について、単なる臆見ではなく、明確なるエピステーメーをもって、ジアレゲスタイしていくものであるとすることによって、エピステーメーに、先導者としての重要な役割を与えているのであるが、このエピステーメーは、「他方、ノエータを対象とする諸々のエピステーメーがあり、それこそ真のエピステーメーであって、ヌースから、ロギケープシューケーへとやってきたものであり、感情的なものは、何一つとして、νοεῖν しないのである……」（V・九・7）という彼のことばからもわかるように、ノエートンを対象とするもので、エピステーメーのエピステーメーたる所以は、ヌースにあるのである。従って、ヌースによる一者の把握が不可能である以上、エピステーメーによる一者の把握は不可能であり、従ってまた、ジアレクチケーによって、一者の把握に迄いたることも不可能である。更に、I・三・5に於ける φοβούμαι μὲν περὶ τὸ ὄν, νοῦν δὲ περὶ τὸ ἐπέκεινα

τοῦ ὄντος. という文章の περί とは、「それをめぐってある」というような意味であり、従ってこの文は、ヌースとしては、存在の彼方にあるものを、中心課題として、検討して行く、という程度の意味であろう。

要するに、ジアレクチケーは、哲学の最も尊き一部として（I・三・5）、エピステーメーを先導者とし、我々を事物の本質の世界、ヌース界へと導いて行くのではあるが、その仕事は、「完全なるヌースへ到達するまで」であって、それを超えて進むことはできない。何となれば、ジアレクチケーの導き手であるエピステーメーをして、エピステーメーたらしめるものは、ヌースであり、魂が一者を把握するためには、ヌースを捨てねばならぬ、ということは、とりもなおさず、エピステーメーも、エピステーメーたることを捨てること、それはジアレクチケーが、その先導者を失うこと、換言すれば、ジアレクチケーは、それ以上進むことの出来ぬ限界に到達したことを意味するのであるから。彼は、この事実を、VI・七・36では、次のようにも述べている。

「善者の認知（グノーシス）というか、あるいはむしろ、それについての直知（エパバー）といった方が適当だろうが、それは、最も偉大な学問（マテーマ）で、プラトンも、[13] それは、最も偉大な学問である、といっている。その場合、彼は、学問ということに関して、善者を見る、ということではなく、それについて、前もって、何らかの事を学ぶ、ということをいっているのである。さてかくて一方、諸々の比較（アナロギア）や抽象（アパイレシス）や、善からでてきた諸々の事柄に関しての認知や、種々の段階的な知的上昇（アナバスモス）は、善について、我々を教え、他方、魂を純化（カタールシス）し、徳（アレテー）あるものとし、秩序づけ（コスメーシス）、ヌース界内に向って上昇させ、そこに魂（ヒドゥリューシス）をしっかりと据え、ヌース界にあるもろもろのもので魂（プシュケー）をもてなす（ステイアーシス）事などは、我々を、善へと運んで行くのである。かくすることによって、人は、自己自身や他のものどもに対して、同時に観る者・観られる者となり、且つ、ウーシアやヌースや、完全なる生者（ゾオーン）となることによって、それを、もはや外側から眺めることはしないのである。で、彼がそれになると、彼は善者の近くにあり、その次に位しているのであって、善者は、近くにあって、ヌース界全体の上に、輝きわたっている。そこに於て彼は、学問全部を捨て、そこまで教え導かれ、美の中に身を据えられて、現在彼

がいるところまで、彼の思惟を高めるのであるが、ヌースの、他ならぬ、いわば波の如きものによって運ばれ、その波の大きなうねりによって、高くへと高められ、突如として、如何に、ということは知らずに、見るのである。……」と。

此の文章から明らかな如く、善者についての学問・ジアレクチケーは、「善者を見る」ということではなくて、「善者について、前もって、何らかの事を学ぶ」ということなのである。そして、人は、ジアレクチケーのたすけによって、ヌース界にはいり、ヌースとなると、彼は、いよいよ善者の近くにやって来た。しかし、そこまで来た彼は、その学問を、すっかり捨ててしまわねばならぬ。そして彼は、純粋なるノエートンそのものとなるのである。これは、ここでは、「ヌースの波の大きなうねりによって、高くへと高められ」ということばで表現されている。しかし、純粋なるノエートンそのものは、自己自らに於ては、ヌースではないとはいえ、ヌースに対しては、ノエートンである。すなわち、一方では、ないが、他方では、あるのであるから、その無は、絶対的な無ではない。そこで最後の努力が必要とされる。しかし彼は、総てを捨てさったのである。彼をたすけ、導いてくれるものは何もない。彼の最後の努力、それは、何もせず、無心に、じっとして待つことなのである。彼はいう、「我々は、それを追い求めてはならぬ。丁度、我々の眼が、日の出を待ちかまえている場合のように、自己自身を、観ようとするものにふさわしい準備だけをして、後はただ、静かに、先方から現われてくるのを待つべきである」（V・五・8）と。かく準備をして、静かに待っていると、それは、「突如として（エクサイプネース）」現われるのである。我々は、無から絶対無への移行をあらわす、この「突如として」ということばの中に、論理をこえた神秘的な飛躍が含まれているのを、見ることが出来よう。そしてそれが、すべてを捨て、自己自らさへもすてねばならなかった魂に残された、一者把握の唯一の手段なのである。

「実にヌースも、このようにして、自分自身を、他のものからさえぎり、内部へと集中し、何も見ない時、他のものの中にある他の光をではなく、自己自らに従って、自己自らだけである、純粋な光が、彼自身の上に、突如として現

われるのである」(V・五・7)。

「魂が、突如として、光をとらえた時、その時すでに、我々は、(一者を)見ているのだと信じなければならぬ」(V・三・17)。

「魂が、運よくこのことを、立派になしとげ、一者が、魂にやってくる時、否むしろ、魂に現在するものとして現われる時、魂が、現存する諸々のものから頭を転じ、そして彼女自身を、できるだけ美しく準備し、それとの同一性へとはいって行く時……、突如として、彼女自らの中に、一者が現われるのを見るのである」(VI・七・34)。

我々は、魂が、ジアレクチケーの先導のもと、ヌース界をくまなくかけめぐり、その窮極に於て、「突如として」一者が、彼女の前に現われるのを見る、というプロチノスのことばにぶつかるとき、彼の、プラトン学徒としての面目躍如たるを、見逃すわけにはゆかない。我々が、このことばに接するとき、すぐに思いだされるのは、プラトンの「饗宴」と「第七書簡」であろう。プラトンの ἐξαίφνης については、田中美知太郎・副島民雄両教授の、優れた解釈があるので、それを紹介して、私のいわんとすることに、代用したい。

「このような美そのものの認識は、個々の認識を超越するのであって、それはプラトンが忽然として(ἐξαίφνης)生ずると言わなければならなかったところのものである。しかしこれは、イデアの超越性に応じて、当然考えられねばならなかったことなのである。しかしその超越性は、吾々にとっては、前後の連絡もなしに、ただ突然に与えられるというようなものでない。それは美の認識を深めて行くときに、その究極に於て、ひとつの飛躍として、啓示される。(14)」

「かくして善のイデアは、ディアレクティケーの最後に、忽焉として観照される。……これは悟道と云う如き、東洋的な表現の仕方に於て端的に理解される作用であって、思惟の極限にまで達したものにのみ可能な一種の飛躍である。(15)」

このプラトンの善のイデアに関して、その研究を徹底的に進め、善・一者の考えに到達したのが、プロチノスであろう。プラトンの善のイデアは、プロチノスに於て深化され、更に輝かしい色彩をはなつにいたったのである。彼は、ジアレクチケーの窮極に於て、一種の飛躍に於て、善・一者の把握に達する。この論文の中心課題であった「テオーリアー」は、ヌースの働きであるから、ヌースを超えた善・一者には適用されない。実に、一者との合一を目的としたテオーリアーは、その窮極に於ては、テオーリアー自身をも超えねばならない。すなわち、テオーリアーの目的は、テオーリアーの否定によって達成される　　（了）

（1）θεωρία. 動詞 θεωρεῖν「観る」という意味。θεωρός は、神の意向を知ろうとしてやって来た人、という意味、こゝから、神の意向を看取する、観る、という意味が出て来た。従って、θεωρεῖν は、右のような意味をもつた θεωρός から出て来たのであるから、単に現実的な環境を見るというのではなく、感覚的な意味を除外して、内面奥深くに、意志を集中することによって、完全で、高尚なものに触れる、という意味を持つのであるが、一般化されて、単に、「見る」という意味に用いられるようになつた。(cf. O. Becker: Plotin und das Problem der geistigen Aneignung 1940. p. 63～70.)

Inge は、イオニア哲学の場合、θεωρία は 'curiosity' を意味し、ヘカタイオスやヘロドトスのような旅行家が、外国を訪れる場合に、θεωρίας ἕνεκα (θεωρία のために) といわれる。秘教等に於ては、sacramental spectacle にこの語が適用された、ピタゴラスになると、sacrament があらわす奥底の真理を観る (contemplation) という意味が与えられた、というようなことを述べている。(cf. W. R. Inge: The Philosophy of Plotinus 1923. Vol. II, P. 178～179)

いずれにせよ、「真理を見る」という意味が、θεωρία に含まれて、用いられる場合があるのであつて、本論文の主題とする θεωρία は、このような意味の θεωρία である。

（2）プラトンでは、θεωρία は νοῦς の知的直観（ノエーシス）と同義に用いられることもある。(cf. Resp. 481 a, 511 c, 517 d, 529 b. Phaed. 65 e, 84 a. Phaedr. 247 c, d. etc.)

アリストテレスでは、νοεῖν, θεωρεῖν と διανοεῖσθαι は峻別され、後者は、肉体的な条件に左右され、肉体の滅亡、すなわち、人間の死によつて、消滅するが、前者は、肉体的な条件に左右されず、その働きを行う νοῦς は、或る種の実体で

あり、永遠不滅、且つ肉体より分離しうる神的なものとされる（De anim. A 4. 408 b 18～29, B 2. 413 b 24～27.）このνοῦς は、同上箇所及び 415 a 11 から推して、νοῦς θεωρητικὸς なることは明らかである。このνοῦς は、質料なき（ἄνευ ὕλης）ものを思惟するとき、思惟されるものと同一となる（De anim. T. 430 a 3, Metaph. 1075 a 3～4.）のであり、この思惟は、彼が「思惟の思惟」（νόησις νοήσεως）と呼んだもので、それがとりもなおさず、彼のθεωρία に他ならない。この質料なきものは、純粋形相に於てあるもの不動なるものとしての神である。従って、θεωρία は、神への直知であり、それ故にこそ、最も快的で、最善なのであつて（Metap. Λ. 1072 b 24）、彼はこの中に、人間の窮極の幸福を見出すのである（Nic. Ethc. K. 1178 b 7）。（cf. Joachim: Aristotle The Nicomachean Ethics 1951. P. 287～297）

（3）「……恰も口外された言論（ロゴス）が、精神（プニューマー）のうちなる言論に対するが如く、精神自身が、また丁度まさに知性（ノース）の言論的（ロゴス）表現なのであつて、それの全体の活動（エネルゲイア）は、自己と異なるものの存在を基礎づけるために、生命を表面に送り出すところのものなのである」（V・一・3）。「例えば精神の如きも、知性の言論的表現であり、現実に営む作用の如きものなのである。これは丁度知性がかのものの言論的表現であり、現実の作用であるのと同様である」（V・一・6）。（以上二つの邦訳は、田中美知太郎「善一者について」より借用す。）以上二つの引用文からしても、明らかなように、魂がヌースのロゴスであるといわれる場合には、その関係は、我々の魂の中にある考え（ロゴス）が充実することによつて、必然的に、ことば（ロゴス）という形をとつて、外に出てきたようなもので、ヌースは、一者からのロゴスを受け、充実することによつて、必然的に、自分の中なるロゴスの外面化として魂を作るのである。すなわち、ロゴスは、またヌースからでた現実（エネルゲイア）の作用であり、生命力でもあるのであつて、魂は、ヌースのロゴスであることによつてのみ、生命力をもつた魂でありえるのである。かくてロゴスは、エネルゲイアなのであるが、しかし、このエネルゲイアとしてのロゴスは、田中教授も指摘されているように、プロチノスに於ては「ひとつの外面化、ひとつの発現として、むしろ発現せぬまゝのものに優位が与えられている。それはアリストテレスの考えとは逆に、現実の作用や活動よりも、それらの作用や活動の能力――アリストテレスの考えでは可能の方が、それのもとにある根本者として、かえつて優位におかれていることを意味する。」（「善一者について」より）。かくて、ヌースは一者の、魂はヌースの、それぞれロゴスであり、各々のものは、それぞれ、上のものよりロゴスを受けとることによつてのみ、各々のものとしてあるものであつて、かかる意味に於て、Inge がロゴスを、'creative power' と訳しているのは、適訳であろう。（cf. W. R. Inge: The Philosophy of Plotinus. Vol. II, p. 156）

（4）「だがしかしながら、（かくして宇宙を作りだす）プロネーシスは、如何なる点に於て、ピュシスといわれるものと、異

なるのであるか。すなわちそれは、プロネーシスは最初にあり、ピュシスは最後にあるという点に於てである。何となれば、ピュシスはプロネーシスの陰（インダルマ）であり、……」それは、例えていえば、ぶあつい蜜蠟の上におされた印形（テュポス）を、裏から見たようなもので、甚だ漠然としており、従つて「ピュシスは、決して知らず、だだ作るのみである。すなわち、何の考慮も払わず無意志的に（ἀπροαιρέτως）、自分に続くところのもの（すなわち肉体的（ソーマチコン）・物体的（ヒューリコン）或は素材的なもの）に、自己のもてるものを与えることによつて、制作するのである」（IV・四・13）。この文章によれば、ピュシスには、「知る」ということが否定されているのである。従つて我々は、ἀπροαιρέτως という語の中に、ピュシスは、意志的な作用を持たぬ、という意味を読みとることが出来よう。

（5）人間の魂は、ヌースを θεωρεῖν し、θεωρεῖν することによつて、ヌースからのロゴスに満たされヌースとなる。またヌースは、一者から溢れでた最初のものであり、より高次なヌースとも考えられるノエートンそのものを θεωρεῖν することによつて、ノエートンそのものとなる。このように、魂が、自己の故郷へと、上昇していくためには、θεωρία が必要とされる。

（6）Inge は、この文の註釈として、次のように述べている。

This seems to be quite true. A product of human labour, in which the spirit and intellect have no share, is a pale copy of reality ; while a work of genius appears to be thrown off from the mental and spiritual life of its auther, rather than to be the direct object of his deliberate activity. (The Philosophy of Plotinus. Vol, p. 162)

（7）式部久・尾渡達雄「西洋倫理思想史」六六頁参照。

（8）プラトンの「魂の眼」に相当する。プロチノスのカタルシスに関する説明文は、他にも多数あげることができるが、いずれも、プラトンのそれと同じである。

（9）註（7）参照。

（10）「叡知界（ノエートス・コスモス）の中に、ἀληθινὴ οὐσία があるのであるが、ヌースは、その世界で最も高貴なものであり、また其処に魂もあるのである。何となれば、魂は、其処からこの世界にやつてきたのであるから。かの世界は、肉体から離れた魂を持つており、この世は、肉体の中に生じ、肉体によつて分割されている魂を持つているのである。で、かの世に於ては、ヌースは、総て、一所に集つてあるのであり、区別されたり、分割されたりすることはなく、他方、魂も総て、一つのコスモスの中にあり、一緒に集つているのであつて、分割されぬものなのである。（しかしヌースと魂の間には、相違がある

のである。すなわち）ヌースは、常に区別されたり、分割されたりすることはないが、しかし魂は、かの世に於ては、区別されたり、分割されたりすることはないけれども、分割されるべきヒュレを持っているのである」（IV・1）

(11) Richard Harder に従って、*ἔστι μὲν οὖν καὶ αὐτός νοητόν, ἀλλὰ καὶ νοῦν, διὸ δύο ἤδη. ἔστι δὲ καὶ ἄλλο, τὸ μετ' αὐτὸ ⟨τὸ⟩ νοητόν.* と、*αὐτὸ* と *νοητόν* の間に、*τὸ* を挿入して読む。

(12) この引用文の最後の *οὐδὲν ἔτι πολυπραγμονοῦσα εἰς ἓν γενουένη βλεπει,* の *ἓν* は、一ではあっても、一者ではない。若しそうでなければ、*τὸ ἕν* とならなければならぬであろう。訳を紹介すると、and busies itself no more, but contemplates, having arrived at unity. (Armstrong), sammelt sich zur Einheit und schaut. (R. Harder). 一なるものとなるとは、ヌース界に於て、主・客同一の状態になることを意味するのではなかろうか。Armstrong, Harder 共に、unity とか Einheit といった語を用いて、The One, Das Eine は用いていない。しかるに Harder は、註釈の方で、gelangt schließlich zur Schau des Einen. と述べているが、果してこの文だけで、そのように結論出来るかどうか、甚だ疑問である。Inge の見解も、Harder と変らない。すなわち、'It traverses the whole domain of the spiritual, and then by analysis returns to its starting point.' Then it rests, in contemplation of the One, ……

(13) cf. Platon: Republic, VI, 504 e.

(14) 田中美知太郎「ロゴスとイデア」三〇三頁

(15) 副島民雄「プラトンに於ける綜合 (*συναγωγή*)」哲学雑誌、第百八十八号、なお、この問題については、A. J. Festugiére: Personal Religion among the Greeks. 中の The Contemplation of God の項も参照されたい。

（筆者　京都大学文学部〔西洋古代哲学史〕大学院学生）

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.

Warum das Dunkel gemalt wurde

von Juzo Ueda

Seit dem 15. Jahrhundert malten viele große Meister in Flandern, Italien, Spanien und Holland das nächtliche tiefe Dunkel vielfach in ihren Bildern. Wahrscheinlich betrachteten sie das Dunkel, gleichwie das Licht, als ein notwendiges Phänomen der Natur, die sie getreulich wie möglich darzustellen suchten. Was ist denn das Dunkel? Wir können in derselben Zeit, während wir ein Ding sehen, nicht ein anderes Ding sehen. Diese Tatsache bedeutet, daß das Sehen ursprünglich das Nichtsehen voraussetzt, d. h. daß das Nichtsehen nichts anderes als ein Zustand des Sehens selbst ist. Das Dunkel nun ist dieses Nichtsehen, insofern das letztere von wissenschaftlichem Gesichtspunkt aus objektiviert gesetzt wird. Das Licht ist eben das objektiv gesetzte Sehen.

The Problems of *θεωρία* in Pl tinus

by Yasuhiko Tanogashira

Starting with examination of what Plotinus means when he says in his Enneades (III. 8. 1) "all things are striving after *θεωρία*", I intend to clarify in this paper the meanings of *θεωρία* in connection with *φύσις*, *ψυχή* and *νοῦς*, and finally to make an attempt to define the boundary of the functions of *θεωρία* and of *διαλεκτική*, by way of which philosophy contemplates (*θεωρεῖ*) the intrinsic nature of all things.

Through the investigations made in accordance with the above process, I have come to the following conclusions in this paper:

1) The problems concerning *θεωρία* in Plotinus make the key point of his philosophical thought, and the final object of the functions of this *θεωρία* is the contemplation of the One, but strictly speaking this is impossible, for the One is neither good nor beautiful nor one nor anything else. It is, as it were, the Absolute Nothing, so when we want to see It, we must throw away all things, matters, doings and studies, that is to say, we must attain a spiritua state of perfect selflessness in order to have a likeness to the One. Therefore we must throw away *διαλεκτική*, too. According to Plotinus, *διαλεκτική* is the most important part of philosophy, and it makes *ψυχή* arrive at the topmost peak of the Intellectual realm (*τὸ ἔσχατον τοῦ ⟨νοητοῦ⟩ τόπου*), where *ψυχή* contemplates (*θεωρεῖ*) herself as *νοῦς* by way of *διαλεκτική*, which, however, can guide her no farther. From this point of view, it is manifest that this is where the boundary of the functions of *θεωρία* and *διαλεκτική* lies, and their functions do not reach the One.

2) Consequently, if *ψυχή* tries to accomplish her own purpose, she should throw away her own *θεωρία* and herself, too. When we attain a spiritual state of perfect selflessness in this way, and when we come to likeness with the Absolute Nothing, then we see It suddenly appearing in ourselves. Thus we may safely say that the accomplishment of *θεωρία* in our spiritual life consists in denying *θεωρία*'s own functions. And this is the last word of this paper.